

キャンプを経験した障害者のソーシャルスキルの成長に関する研究

桑木 一生 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)

指導教員 林 綾子

キーワード：キャンプ, 障害者, ソーシャルスキル

1. 序論

障害者の雇用率は低いままであることなど、社会参加への困難な現状は続いており、その対策としてソーシャルスキルトレーニング (SST) が行なわれている。キャンプは実際の「生」の交流体験活動であり、実用的な社会的スキルを育むための絶好の環境であることから、障害者のソーシャルスキルの成長の場として期待できる。

そこで本研究では、キャンプを経験した障害者のソーシャルスキルの成長に関する調査を行った。

2. 研究方法

【対象者】障害者のためのキャンプを実施している特定非営利活動法人 A に所属しているキャンプカウンセラー (35 人) に調査協力を得た。

【調査方法】2016 年 8 月 1 日～4 日、10 月 17 日～21 日にアンケート調査を実施した。調査内容は、これまでのキャンプ経験から、ソーシャルスキルが成長したキャンパーについて、一人 3 つまでの事例の詳細の記述である。ソーシャルスキルについては、上野・岡田 (2006) の「社会生活や対人関係を営んでいくために必要とされる技能」の定義と 4 カテゴリー 13 項目の分類を用いた。データは内容分析法にて分析を行った。加えて、その障害者の障害の種類や程度などの障害者の特性、障害者のキャンプ体験の意義について記述を求めた。その結果、73 事例が得られ、内容が該当しない 2 事例を除く 71 事例を分析に用いた。障害の種類に関しては発達障害 (58%)、知的障害 (41%)、その他 (肢体不自由や脳性麻痺) (1%) であり、障害の程度は軽度 (34%)、中度 (12%)、重度 (34%)、最重度 (12%) であった。

3. 結果と考察

事例分析の結果、キャンプを体験した障害者のソーシャルスキルの成長に関する事例は 4 カテゴリー 13 項目すべてに該当する成長が見られた。それらの成長について、カウンセラーとの関わり、他のキャンパーとの関わり、キャンプ生活、キャンププログラムといった要素が障害者のソーシャルスキルの成長を促しており、その要素と成長が見られたソーシャルスキルの分類の関係を図 1 に示した。【集団行動】については、最も多くの事例が挙げられており、「挨拶」「お礼」「お詫び」などの対人マナーがカウンセラーからの促しの繰り返しや、他者からの模倣などから学習され、また、「周りを見て自分から行動する」などの状況理解

や仕事の遂行がキャンプ生活の中から学習されたことが伺える。【仲間関係スキル】については、「友達が泣いている時に、肩をトントンとたたいて頭をなでる他者を思いやる行動が見られた」などの記述があり、それらは仲間意識などの他のキャンパーとの関わりや、必然的な他者との関わりのあるキャンププログラムの要素との関連がみられる。

【セルフコントロール】については、「パニックにならずに気持ちを落ち着けられるようになった」などの記述があり、それらは、カウンセラーからの促しの繰り返しや、キャンプ生活でつきもののアクシデントの要素が関わっていた。【コミュニケーションスキル】に関しては、自然体験活動での好奇心から「ウミガメのエサやりをやりたくて発信することができた」などの記述があり、それらはキャンププログラムでの自然や動物との関わりの要素が関わっており、また、必然的な他者との関わりが常にあることは大きな要因であると思われる。

多くの事例は、キャンプに複数年参加している障害者であり、体験の積み重ねの重要性が示唆された。また、障害の程度を問わず、すべての領域のソーシャルスキルの成長が見られたが、重度の障害者は初歩的なソーシャルスキルの成長にとどまっており、段階的な成長への支援が必要であると考えられる。

4. まとめ

本研究で、キャンプ体験の積み重ねが障害者のソーシャルスキルの成長を促すことが示唆された。今後、キャンプが障害者教育の現場により広く取り入れられることを期待する。

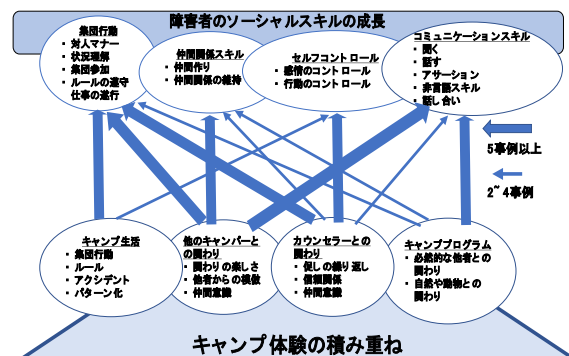


図1 ソーシャルスキルの成長の促しについての概念図

引用文献

- 1) 上野一彦・岡田智 (2006) 特別支援教育「実施」ソーシャルスキルマニュアル。明治図書：東京。